

HÔBÔGIRIN (Cinquième Fascicule),

Paris & Tokyo, 1979.

櫻 部 建

『法宝義林』第五分冊が出た。戦後に出された二つ目の分冊である。通頁にして三七一―五六三ページを含み、「超越証」の項の途中から始まって「中有」の項の終りまでの二十三項目が収められている。もっとも「超越証」はその最後の二ページに収められており、「超越三昧」は(第四分冊所収の)「超定」に同じとされるのみであるから、実際の内容はほぼ二十一項目である。執筆者は全部で十人。その中で、八項目を担当した H. Durt (ベルギー)、七項目を担当した J. May (スイス)、「中胎」一項目のみであるが二十四ページにも亘る長文のアルティクルを寄稿した R. Duquenne (フランス)、二項目十五ページを担当した A. Seidel (ドイツ) などが主要な人々である。邦人では御牧克己氏が「中道」の項を May 氏と共同で執筆している。こういう多彩な国際的執筆陣が、広い文化史的視野をもってたずさわった協同作業のこの成果は、まことにわれわれを啓発するところが多い。

法宝義林は「シナ・日本の資料による百科全書的佛教辞典」を標榜する。その点であたかも望月佛教大辞典とやや似た性格がある。今次の分冊に含まれる二十一項目の中、十までは望月辞典に同一項目が見出され、三つまではほぼ同じ項目が見出される(法宝義林に見える「中観」「中間定」「偷盜」の項目が望月辞典では「中観派」「中間静慮」「偷盜戒」として立てられている)。残余の八項目は望月辞典で独立した項目として立てられてはいないが、もちろん、そのほとんどはほかの諸項目の下で解説が与えられている。そこで、われわれにとって、法宝義林を望月辞典と対照しながら読むのがたいへん有益でありかつ興味深いことになる、といえは奇妙に聞こえるであろうか。法宝義林はそれ自体望月辞典をよく参照しており、いうまでもなく数十年前に出された望月辞典に比して新たに多くの資料を渉猟している。望月辞典刊行以後最近に至るまでに著しく進んだ世界の佛教研究の成果がくまなく取り入れられていることによって、法宝義林がわれわれに教えるところは甚だ多いのであるが、しかもなお、われわれにとって、望月辞典と法宝義林との対読は無用ではない。無用などどころか、そのことがこの優れた両佛教百科辞典の魅力をさらに増すのであり、それによって両辞典が相俟ってわれわれにより多くのものをそこから汲み取らせてくれることになるのを、つたない経験から、わたしは疑わないし、読者諸賢にもその対読を試みられるようお奨めしたく思うのである。

* * *

一、二の項目をとり挙げて、この分冊の内容を摘示しよう。

「籌」はデュルト氏が担当し、分冊中最長の論文である。(1)用語、(2)概観、(3)布薩・安居などの場合籌を用いて数を数えること、(4)僧伽において遺物などを分配するのに籌を用いること、(5)滅諍のために籌を用いて数を数えること、(6)インド佛教の史伝の中での籌、等の十の条項に分けて詳説されている。籌の原語 *śāṭaka* (時に *śīṭaka*) は、*śāṭya* (鎌、箭) と語源を同じくするらしく、一方また「ピン」「小刀」などの意味にも用いられる、とする。僧伽内におけるこの語の用い方については、パーリ律を含めた六部の広律のほか、新出の大衆部系説出世部の律典 *Abhisamacarika*、道宣の行事鈔や元照の資持記などの釈疏、義浄の南海寄帰伝その他を縦横に引用して詳しく解説している。(6)の条項の下では、提婆達多や阿難についての物語、根本分裂や第二結集についての史伝の中で、籌が重要な役目を荷っていることが語られる。叙述はシナ・日本の律法の伝承にも及んで、道宣の説と総持寺の登山の説との相連点が短切に指摘されている。

「中有」は A. Bareau (フランス) の執筆に係る。中有の存在が説一切有部・後期の化地部・犢子部・正量部・東山住部によって是認され、パーリ上座部・分別説部・初期の化地部・大衆部および舍利弗阿毘曇論(筆者はこれを「疑いもなく法蔵部に属する」と断ずる)によって否定されたことを述べ、意成・求生・食香(乾闥婆)・中有・起の五名の挙げられることを説いて俱舍論・成実論の所論に触れ、大乘経論の中有に關説

するものとして大般涅槃經卷二七・大宝積經卷五六(入胎藏会第十三)・地藏菩薩本願經・大智度論卷四・瑜伽師地論卷一、卷五四・大乘阿毘達磨集論卷三・雜集論卷六・釈浄土群疑論卷二などの所説について簡明な解釈を与えている。また、チベット佛教は法宝義林の扱う範圍を越えるが、と断りながら、Kazi Dawa-Sandup ラの Bar doi thos bol (死者の書) が中有に關して逸すべからざる文献であるとして、それについてのビブリオグラフィまで詳しく紹介している。因みに、ここでパロー氏は触れておらず、望月辞典にも名を挙げられていないし、A・ウエイマンの論文(I・B・ホーナー記念論集、一九七五年)にも關説されていなかったが、「三弥底部論」(大正一六四九)も、また、中有に關説する重要な文献の一つとして取りあげてよいものであろう。

* * *

法宝義林が、日本における佛教語の伝統的な読み方によく注意して、それをローマ字によって正確に写し示していることは日本人にとっても大いに有意義である。おそらく、初学の人々はそれによって利せられることが多いであろう。「諷經」が *faṅḡin* であり「分衛」が *bunne* であり「法堂」が *hatto* であり「閻浮檀金」が *embudagon* であることを、これによって初めて知るわが国の若い世代は必ずしも少なくないと思われる。あるいは、「長阿含」が *Jāgona* であり「義林章」が *Giriṅjo* であることを、である。

そのようにいえば、「暴流」は *bōru* (p. 371a, l. 28) よう

も born が、「金色」は konsniki (p. 531b, l. 44) よりも
 konjiki が、「辺執見」は henshukken (p. 459b, l. 11) より
 も henjikken がよかっただかもしれなう。また、普は呉音ギで
 あつても「普宿」はふひん gishuku (p. 388a, l. 22) ではなく
 kishuku と発音されているし、鉢は呉音ハチであつても「覆
 鉢」はふひん fukubachi (p. 450b, l. 12) ではなく fuhatsu と
 発音されている(中村、佛教語大辞典、一・一八二p)。

* * *

この分冊の印刷は韓国でなされた。その関係で校正などと思
 うにまかせぬ事情があつたのか、日本字のミズプリントがいく
 ぶん目につくのは残念である。

p. 380a, l. 42. 膝つきー膝つき

p. 400a, l. 9. 諸佛→諸佛

p. 427b, l. 7. 作體→作禮

p. 430a, l. 30. 蘭甘→甘肅

p. 432b, l. 15. 利生→殺生

p. 442a, l. 30. 波途提→波逸提

p. 446a, l. 13. 突吉羅→突吉羅

p. 450b, l. 26. 玄裝→玄奘

p. 467b, l. 20. 天臺→天台

p. 458b, l. 9. 窺其→窺基

p. 485b, l. 42. 依多起→依他起

p. 505a, l. 29. 綠覺→緣覺

p. 505b, l. 47. 辛→辛(?)

p. 519a, l. 2. 貧→貧

p. 531a, l. 44. 果實→果實

p. 533b, l. 19. 佛教美術→佛教の美術

p. 533b, l. 23. 落陽→洛陽

p. 536a, l. 35. 曼茶羅→曼茶羅

p. 538b, l. 3. 三昧→三昧

p. 538b, l. 14. 鬘藥→鬘藥

p. 541b, l. 16. 太子→太子

p. 546b, l. 46. 覽瓶→賢瓶

奥附 梵貝→梵唄

* * *

最後に、久しく相国寺山内林光院の一隅なる法宝義林研究所
 に在つて、この分冊刊行の作業にも中心的な役割を果たしたユベ
 ール・デュルト氏は、その文化的貢献のゆえに、近時、フラン
 ス政府から褒章を贈られたことを、同慶の念をもって、附記す
 る。

(26 cm×18.5 cm, 日本での発行所、東京、日仏会館)